

『氷室』2017年12月号掲載用

季語つれづれ 番外(二五) 初冬 尾池和夫

【八手の花】 花八手

五加科の常緑低木の八手の花である。暖地の海岸に近い山林に自生する。庭に観賞用に植えられているのも多い。葉の形が特徴的である。直径約五ミリくらいの白い花が毬状に固まっている。それが翌年の春には黒い球形の果実となる。

学名の「ヤツデ属 (Fatsia)、種ヤツデ (F. japonica)」のFatsiaは、八手(音、ハッシユ)によるという。日本原産の八手は東北地方を北限として沖縄まで自生する。実際葉を数えると八裂の葉は少ない。

大きな掌の形の葉が魔物を追い払う力があると信じられており、天狗の羽団扇とか鬼の手などと言われ、魔除けとして玄関の目につく所に植えられる。また、掌が人を招くというので玄関に植えるという人もいる。

花は虫媒花であるが昆虫の少ない真冬に開花するので、昆虫を引き寄せるため甘い蜜を蓄えている。同じ花の受粉を避けるため、花は両性化であるが普通の両性化ではない。雄蕊と雌蕊の成熟時期をずらして同じ花での受粉を避ける仕組みが巧妙にできている。

民間薬として葉を乾燥させたものを鎮咳、去痰で服用するが、葉と茎と根に「ヤツデサポニン」という毒があり、

多量に摂取すると障害がある。昔は葉から殺虫剤を作ったという。また、葉を乾燥させて煮出した液を風呂に入れてリウマチに効く入浴剤ともしていたという。

『氷室』2018年2月号掲載用

季語つれづれ 番外（二六） 晩冬 尾池和夫

【寒紅】 丑紅

寒中に製造する紅の品質は高い。薬用にもなる。初夏に摘んだ紅花から紅花餅を作って保存する。それを寒中に取り出して紅を作り、あるいは紅花染を行う。この紅は山形の特産品で、それが京に送られた。紅は江戸後期から明治にかけて寒中の丑の日に売り出されるものが最高級品であると言われ、丑紅の名が付いた。

草木染で最も鮮やかな紅花染も、やはり寒中に染めるのが最高の色合いとなる。初夏、棘の柔らかいうちに手作業で摘んだ花に水を加え、黄の色素を流しさつて、足で踏んで発酵させて乾燥、煎餅状の紅花餅にして保存する。

これを寒中に取り出し、灰汁を加えた水に紅花餅を浸して紅色を抽出し、酸性の液で中和させる。この工程に烏梅（うばい）という完熟梅の実を燻蒸したものが用いられる。

染める過程には冷水が用いられる。山形では寒中に水桶に手を浸して染める。この染めの工程を繰り返すことによっ

てさまざまな紅の色を生み出すのが職人の技である。

山形市の東北芸術工科大学美術科テキスタイルコースでは、毎年四月中旬に紅花を大学の畑に蒔く。五月下旬、「おるぬき」と呼ばれる間引きを行い、七夕の頃の朝、花を摘み紅花餅を作って保存して寒中に染める。晋代の『博物誌』に見られる技法を、同大学の辻けい教授が学生たちに伝える。

『氷室』2018年3月号掲載用

季語つれづれ 番外(二七) 仲春 尾池和夫

【観潮】 渦潮見 渦見船 観潮船 渦潮

鳴門海峡では旧暦三月三日前後の大潮に大規模な渦潮が現れる。淡路島と大毛島、島田島との間のこの海峡は日本百景の渦潮の名所である。大鳴門とも呼ばれる。海峡の最狭部の幅は約一・四キロ、大鳴門橋の橋脚の立つ浅瀬と裸島の間の深さは約九〇メートル。その北側に深さ二〇〇メートル南側に深さ一四〇メートルの海釜がある複雑な海底地形をなす。

さらに播磨灘と紀伊水道では、ほぼ正反対の潮の満ち引きが起こり、両水域の潮位差は大潮の時、一・五メートルにもなる。これにより時速最大二〇キロの潮流が生まれる。最狭部の下流側の渦潮の直径は一五メートルになる。瀬戸

内海の来島海峡、関門海峡、鳴門海峡は日本三大急潮と言われるが、長崎県の針尾瀬戸でも渦潮を見ることができる。

来島海峡では潮流の向きで航路が変わる世界で唯一の航法が採用されており、転流、つまり潮流の向きが変わる時刻の一時前から、船は「転流時通報」を発しながら海峡に入るという航法である。

瀬戸内海は、たまたま海面変動で現在は海であるが、もともと大きな河であったと考えることもできる。海外の大きな河でも、中国の銭塘江には河口から激しい流れが遡る海嘯（かいしょう）があり、また南米アマゾン川にはポロロッカと呼ばれる激しい海流が知られている。

『氷室』2018年3月号掲載用

季語つれづれ 番外（二八） 仲春 尾池和夫

【流水】 氷流る 流水期 海明

流水は水面を漂流する氷のことで、陸の定着氷以外の氷を指す。海水が凍った海氷、冰山、河川氷が流水に含まれる。打ち上げられた流水が重なって丘になれば氷丘と言われる。それが高さ数メートル、長さ一キロというような山脈になると流水山脈と呼ばれる。

北海道では、その季節になって初めて沿岸から流水が確認された日を「流水初日」、一月下旬から二月上旬に接岸し

た初日を「流水接岸初日」という。沿岸から見渡せる海域の流水が五割以下となって、かつ船舶の航行が可能になると「海明」が宣言され、さらに沿岸から最後に流水が見えた日を「流水終日」という。

海の水は、上下の水が混合しながら冷える。したがって深いと冷えにくい。オホーツク海は海水が二層構造になっており、海面から五〇メートルまでは塩分の薄い海水、その下は塩分濃度の濃い海水である。これら二層の海水は混合しないので、上の層は海水の凍るマイナス・八度に達しやすい。それで毎年流水が見られる。太平洋側の深い海では、対流する時間が長いので海水が冷える前に春が来る。ブイによる調査で、北海道の流水は、サハリン北東部から南下して北海道に達することがわかった。それと北海道産の流水が混じった流水を見ていることになる。

『氷室』2018年4月号掲載用

季語つれづれ 番外（二九） 晩春 尾池和夫

【都をどり】

毎年四月、京都祇園花見小路にある祇園甲部歌舞練場で、舞妓や芸妓が絢爛豪華な踊りの舞台を見せる。舞妓たちの「都をどりはー」、「ヨイヤアアサー」という掛け声で始まる。

明治維新で東京へ遷都したあと、京都の伝統を保ちながら近代都市を建設しようと博覧会が企画され、余興に祇園の芸舞妓のお茶と歌舞を公開するという案が実現し、それが第1回「都をどり」となって、一八七二（明治五）年、祇園新橋小堀の家で開催された。八〇日間、舞方三二名、地方一一名、囃子方一〇名、計五三名が七日間演じたという。

二〇一七年、二〇一八年の都をどりは、「都をどり in 春秋座」としてポスターを飾った。祇園新地甲部歌舞練場が耐震対策に着手するため一時休館となり、京都造形芸術大学の劇場である京都芸術劇場春秋座に舞台を移した。春秋座の舞台は、廻り舞台や花道、すっぽんなど、歌舞伎のための設備を持っており、その設備を大胆に活用され、かなり新しい演出の都をどりとなった。

京舞井上流を創始した、長州浪人の娘、井上サトは初世井上八千代となった。近衛家に仕えてあらゆる芸能の基本を取り入れて、井上流が生み出されという。それを磨き上げて伝える現在の家元、五世井上八千代が、この春秋座での都をどりに挑戦してたいへん好評であった。

『氷室』2018年4月号掲載用

季語つれづれ 番外（三〇） 晩春 尾池和夫

【壬生念仏】 壬生踊 壬生狂言 壬生の鉦 壬生の面

「みぶねぶつ」とも読む。京都市の壬生寺で四月二〇日から二九日に開催される大念仏法要である。円覚上人が熊倉時代の末ごろ、悪疫退散のために法会を営み、融通念仏を唱えたのが始まりと伝えられる。これが鰐口(わにぐち)・太鼓・笛に合わせ、まったくの無言仮面劇としての狂言に発展して今に至っている。国の重要無形民俗文化財に指定されている。

壬生寺の現在の本堂は一九七〇(昭和四五)年の再建である。境内には大念仏堂があり、これが壬生狂言舞台となる重要文化財である。また、近藤勇銅像、壬生塚があり、パゴダ様式の仏塔に一〇〇〇体の石仏を円錐形に安置した千体仏塔などがある。

九九一(正暦二)年、園城寺(三井寺)の僧快賢が母のために建立したとされ、京都では珍しい律宗寺院で、総本山は奈良の唐招提寺である。元の本尊、地蔵菩薩半跏像は鎌倉時代後期の作で、「壬生地蔵」と呼ばれていたが、一九六二年、放火により本堂とともに焼失し、今の本尊、地蔵菩薩立像は、火災後に唐招提寺から移された。

幕末には新選組(初めは壬生浪士組)〔選〕の表記は「新選組壬生屯所遺蹟」の表記に従った)の本拠が壬生村の木家に置かれ、寺の境内は新選組の兵法調練場に使われ、武芸などの訓練が行われた。

『氷室』2018年5月号掲載用

季語つれづれ 番外(三二) 初夏 尾池和夫

【幟】 五月幟 座敷幟 初幟 鯉幟 吹流し 矢車

鯉幟は日本の風習で、江戸時代、武家で始まった端午の節句を祝う幟である。元来旧暦五月五日までの梅雨の時期に、男児の出世と健康を願って庭先で飾られた。紙や布や不織布などに鯉の絵柄を描き、吹流しを鯉の形に模して作った。

現在では、一般的には新暦五月五日の前に飾られる夏の季語となっている。したがって晩春の青空になびく姿が一般的となっている。地域によっては旧暦の端午や一か月遅れの新暦六月五日に祝う所もある。

江戸時代には定紋や鍾馗の絵を染め抜いた幟を、兜や長刀や吹流しとともに家の前に立てたという。元々は紙製で、小型の物が座敷幟となった。このような武家の幟に対して、町人は滝登りをする鯉を出世の象徴とした。それが鯉幟となり男子の成長を祈った。

真鯉のみであったのが明治からは緋鯉と対で揚げるようになり、昭和になって家族を表す子鯉（青鯉）を添える習慣となり、さらに真鯉に金太郎が自分より大きな鯉を捕まえる姿となった。鯉などを描いた吹流しを一番上にして、真鯉、緋鯉などを大きさの順に並べて揚げる。

今では、生産量日本一の埼玉県加須市で全長世界一の鯉
幟ができたり、高知県吾川郡いの町では水で破れない和紙
の鯉幟が仁淀川に放流されたり、四万十川では五〇〇匹の
鯉幟の川渡しが行われたり、お国自慢の鯉幟も増えている。

『氷室』2018年5月号掲載用

季語つれづれ 番外(三二)

尾池和夫

【朝曇】晩夏

朝曇が夏の季語として定着したのは近代以降である。「早
の朝曇」などと伝わる地域があり、昼から暑くなる日は、
朝どんより曇っていることがある地域である。日本列島は
多様性の豊かな大地を持ち、気象現象も局地的に多様な現
象を生み出す。その土地固有の地形、海、山、平野の配置
を反映する気象現象、風土がある。地域の気候や気象を表
現する諺があり、「天気俚諺」とか「観天望気」と言われる。
その意味をしっかりと踏まえて詠むことが重視される類の
季語の一つであろう。

一般的に、朝曇であれば、低気圧が近くてやがて雨にな
る。晴れた空を見渡すと局所的に朝だけ霧や雲がかかる場
所があり、それは山に囲まれた地域である。夜間の放射冷
却で地上が冷え、斜面の冷気が平野に下りて大地を冷やし、
水蒸気が飽和して雲や霧が発生する。朝日が昇ると気温が

上ってそれが消える。このような「朝曇」は局所的な現象である。

気象庁が天気予報などで用いる予報用語の中にあるが、備考に「通俗的な用語のため予報、解説には用いない」とある。

朝雨に傘要らず、朝曇り昼日和、朝靄昼日和、朝雨に女の腕まくりなどの言い方で地域の「朝曇」の特性が伝えられている。気象庁から提供される観測データや気象レーダー、アメダスなどの情報を分析し、地域の地形や特性も踏まえて天気を予測する仕事をするのがその地域の気象予報士である。

『氷室』2018年6月号掲載用

季語つれづれ 番外 (三三二)

尾池和夫

【季語の原点(その一)】

京都で生まれた季語の中には、京都でしか詠めない季語がたくさんある。川床(ゆか)、祇園会、大文字、時雨などである。京都の祭事を綴った『季語になった京都千年の歳事』(井上弘美)にはとくに詳しく描かれている。

日本全体の年中行事の代表は季節の節目ごとの節句である。人日、上巳、端午、七夕、重陽の五節句で、古代中国で陽である奇数の重なる日に設定されている。宮中と貴族

社会で行われていた節句が、江戸時代には式日に制定された。五節句の他に二十四節気がある。太陽の黄道上の位置によって二四等分した約一五日ごとの季節区分であり、一年が一二の中気と節気に分類され、立春、夏至、秋分、冬至などの名がある。農作業で季節を正しく知るために、中国の戦国時代に生まれ、日本では江戸時代から広く使われてきた。とりわけ季節感のある京都で二十四節気が自然との共生が文化として育てられた。また、節分などの季節の変わり目を示す雑節があり、生活や農作業と連動して日本独自の文化が育ってきた。

宮坂静生は、著書『季語の誕生』で、季語は時代とともに変わり、地域による季節感と合わないために、歳時記にとられると実景がおろそかになると、季語の見直しも必要と述べている。季語の成立経緯をたどり、平安貴族による都中心の季語の本意をひるがえした芭蕉こそ、季語変革の先駆者と位置づけている。

『氷室』2018年6月号掲載用

季語つれづれ 番外 (三三四)

尾池和夫

【季語の原点(その二)】

最古の季題集『はなひ草』(野々口立圃)は、一六三六年の出版で五九〇の季題、『山の井』(北村季吟、一六四八年)

で一三〇〇、『俳諧歳時記』（曲亭馬琴、一八〇三年）では二六〇〇であった。

芭蕉の正門俳諧では、伝統的な季語を「豎題」、新しい季語を「横題」と呼び、季語の発掘を推奨。正岡子規、高濱虚子は、俳句の主題は四季を反映した自然であるべき「花鳥諷詠」を説いた。現代の歳時記では五〇〇〇ほどの季語が収録されている。

季節感の基になる緯度に関しては、長安、平安京、江戸の緯度がほとんど同じであるから季節感は共通する。

経度については、時刻の概念が重要で、時についての最古の記録は『日本書紀』にある「漏刻」である。一昼夜を一二等分していたようで、時刻に十二支をあてはめて呼んだ。

一昼夜を二四等分したのが定時法、昼と夜を季節によって等分したのを不定時法と呼ぶ。奈良、平安時代は定時法、鎌倉、室町時代は不定時法、江戸時代は両方であった。一八七二年（明治五年）一月三日（太陽暦明治六年一月一日）から太陽暦で定時法と時刻制度が定められた。

ちなみに現在の日本経緯度原点は、測量法施行令により「東京都港区麻布台二丁目18番」地内日本経緯度原点金属標の十字の交点」と定められている。

【青鷺】

青鷺はユーラシアの中緯度で夏繁殖し、冬にアフリカ中部、東南アジアなどへ渡る。アフリカ南部やユーラシア南部では留鳥である。日本の亜種青鷺は北海道で繁殖し九州以南へ冬渡る。本州や四国に留鳥もいる。繁殖期には群れ、繁殖期以外は単独で、食は魚、昆虫や甲殻類、カエルや蛇などの両生類も食べ、獲物を横取りもする。

灰色の羽が青く見える。英語で〈Grey heron〉という。繁殖期に目や嘴や後肢がピンク、非繁殖期は目が黄緑、嘴や後肢が黄となる。翼を広げると一七〇センチ、体重一・八キロと大きい。雄が大きく後頭部に黒い羽、胸部の羽が伸びる。子を守るため高木に巣を作る。

グエツとかギャーと鳴き、優雅な姿に声が合わない。青鷺は怪異とも言われ、青白く光る鷺を「五位の火」とか「五位の光」と呼ぶ。鳥山石燕『今昔画図続百鬼』と竹原春泉『絵本百物語』に掲載された。歳とると火を吐き、燃える枝を啜えて飛び、火の玉になる。水辺の発光バクテリアが羽に着いて光るためであろうといわれる。

一方、縁起がいい鳥ともいわれ、毎年同じカップルの一夫一妻の行動で知られる。古代エジプトで、フェニックスの由来である「ベヌウ」とされ、神と崇拝された。羽がヨーロッパの女性の帽子の羽飾りにも用いられる。

『氷室』2018年7月号掲載用

季語つれづれ 番外(三六) 三夏 尾池和夫

【赤鱧】 鱧

鱧、鰩、海鰻魚などの文字も使う。板鰓亜綱に属する軟骨魚類のうちで鰓裂が体の下面に開くものの総称である。鰓裂が側面にあるサメと区別する。世界中の海の暖海域から極域まで広く分布している。淡水に適応したものもいるという。体長が一メートルにも達する場合があり、上下に扁平で背と尾が黄味がかかった赤色、海底の砂泥にべたっとしているの上から見ると菱形の体に長い尾がついた姿である。その尾には毒があつて、刺されると激痛が走るといふ。また、「シビレイ」は強力な電気を発するので扱いに注意が必要である。

鱧の皮は日本刀の柄や革製品に利用されてきたが、鱧の尾の針を鏝にしたものが、多賀城の古墳時代の遺跡から見つかっているという。

現在、根室港や稚内港の水揚げが多く、北海道ではほとんどが下処理済みで生の状態で販売され、通称「カスベ」と呼ばれるが、本来カスベは鱧の鱗である。秋田県や山形県では鱗の軟骨部分を干して長時間煮て、甘辛く煮付ける。秋田ではそれを「かすべ」、山形では「からかい」と呼び、

郷土料理として知られる。ガンギエイの鰭を乾した「エイヒレ」は酒の肴である。鮫と同じく尿素がありアンモニアを生じるが、韓国にはこれを強調した加工食品もある。

『氷室』2018年8月号掲載用

季語つれづれ 番外（三七） 初秋

尾池和夫

【天の川】 銀河 銀漢 星河

京都では天の川がよく見えないが、空の澄む地域へ旅行すると、夜空に帯となって恒星の集まりが見えるのが愉しみのひとつである。天の川は一年中見られるが、秋が最も明るく美しい。万葉集からは七夕伝説と関連して詩歌に詠まれ、俳諧では天の川の美しさを詠むようになった。

天の川は、天の川銀河を、その中にある太陽系の地球から眺めた姿である。天の川銀河には数千億個の恒星が、直径約一〇万光年の円盤状の範囲に渦巻くように集まっている。銀河という呼び名は普通名詞で、宇宙には無数の銀河が存在する。その中で太陽系が含まれる銀河が「天の川銀河」という固有名詞で呼ばれる。他の銀河を外から私たちは観測する。約二五〇万光年離れた隣にあるアンドロメダ銀河などの姿から、天の川銀河も同じような円盤の姿だと推定する。

天の川銀河の中心は、太陽系から約二万八〇〇〇光年の

所にあり、太陽系は天の川銀河の端に近い所にある。そこから全体を見ると川のような帯状に観測される。天の川の濃い部分、蠍座や射手座は夏の星座で、八月の日没後、南の空にある。そこから、夏の大三角、カシオペア座、冬の大三角へとつながっている。冬に見る天の川は、天の川銀河の中心と反対側を見ていることになって濃くは見えない。つまり天の川を観測する最適の季節は初秋であるということになる。

『氷室』2018年8月号掲載用

季語つれづれ 番外 (三八) 初秋 尾池和夫

【七夕】 棚機 棚機つ女め 七夕祭 乞巧奠 星祭 星
祭る 星合 星の恋 星の契 星迎 星今宵 二星 牽牛
織女 彦星 織姫 七夕竹 七夕流し 願の糸 五色の
糸 鵲の橋

旧暦七月七日で、五節句の一つである。七夕は、中国の牽牛と織女の伝説と、それから派生した乞巧奠の行事のことである。それが伝わって日本古来の棚機津女（たなばたつめ）の伝説と習合した。笹竹に詩や歌を書いた色紙の短冊を吊し、字や裁縫の上達を祈る行事である。

神事は一般に「夜明けの晩」に行うとされる。七夕の祭は七月六日の夜から七月七日の早朝の間に行う。午前一時

ごろには天頂近くに主な星が位置しており、天の川、牽牛星、織女星の三つがよく見える時間帯となる。

短冊の五色は五行説による五色で、緑紅黄白黒である。中国では五色の糸をつるす。お盆や施餓鬼法要の五色の施餓鬼幡からの影響もある。里芋の葉の露で墨をすり、梶の葉に歌を書く。俊成の歌に、「たなばたのとわたるふねの梶の葉にいくあきかきつ露のたまづさ」とある。

地域によつては、半夏生のように農作業の体を休めるための日であり、あるいは雨乞いや虫送りの行事と融合した姿もある。沖縄では、盂蘭盆会の一環と位置づけ、墓を掃除し、先祖に盂蘭盆会が近づいたことを報告する。

『氷室』2018年9月号掲載用

季語つれづれ 番外（三九）三秋

尾池和夫

【木天蓼】 またたび

マタタビ科の蔓性落葉低木で、近縁種としてサルナシ、ミヤママタタビがある。北海道から九州の山地に自生、初夏に咲く白色五弁の花は夏梅という名を持ち、「木天蓼の花」として夏の季語である。楕円形でとがった果実が「木天蓼」として秋の季語である。熟すと黄色になる。

木天蓼は成長が早く、あつという間に葉が出て花が咲き実を結ぶ。若芽は五月六月にどんどん成長する。若芽や花

はゆでて和え物や酢の物にし、葉で木天蓼茶を作る。果実は塩漬けや果実酒にする。

どんぐり型の実は正常な果実で、普通に食用にするが、かぼちや型は開花時期にマタタバアブラムシが寄生し、果実がこぶ状になったもので「虫えい」と呼ぶ。これはマタバヒ酸の成分の発散が少なく、この虫えいを果実酒にしたものを「マタタバ酒」と呼んで重宝する。

猫に強烈な恍惚感を引き起こすのは実であるが、その中でも虫えいだけと言われる。虫えいの粉を嗅ぐとよだれを垂らして頬や顎を擦り付け、寝転がって体をくねらせ、背中から腰にかけての皮膚が波打ち、大声で啼きわめく。この陶酔反応は数分続く。人間の生薬として用いられるのも同じ虫えい果である。体を温め、滋養強壮、利尿、免疫力増強、生活習慣病予防に効果がある。

『氷室』2018年10月号掲載用

季語つれづれ 番外(四〇) 三秋

尾池和夫

【律の風】 律の調べ

律の風(りちのかぜ)とは、「律の調べ」とともに、秋らしい趣のある風をいう。音の調子を表す「呂律」から来た言葉である。日本では呂は陽、律は陰である。古来中国では、逆に律を陽とし、呂を陰としたそうである。

「呂律」は、日本音楽で呂② ③ ④ と律⑦ ⑧ ⑨を合わせた呼び方で、転じて、十二律、音律、音階、調子など、さらには広く音楽理論や音楽そのものをさす言葉となった。

読み方が転じて「ろれつ」となると、呂律が回らないというように使われる。器質性構音障害で呂律が悪い場合、改善するためには舌の癖を治すことが必要だという。

教典に旋律をつけて合唱するのが声明であるが、声明の里として知られる京都大原には、三千院をはさんで、呂川（りよせん）と律川（りつせん）という二本の小川が流れている。声明の呂旋法と律旋法とに因んだ命名である。

雨も風も、日本列島には多様な呼び名があるが、秋の風の呼び名を拾い集めてみてもたくさんある。秋風、素風、金風、色なき風、爽籟、蓼風、鷹風、やまじ、悲風、新北風、鮭嵐、黍嵐、雁渡、おしあな、送南風、荻の風、色なき風、芋嵐、青げたならい、青北風と果てがない。

『氷室』2018年10月号掲載用

季語つれづれ 番外（四一） 三秋 尾池和夫

【枝豆】 月見豆

熟しきってない大豆や黒豆を塩茹して食べるのが枝豆で

ある。店では、生ビールとセットで注文することになるが、ビールは三夏、枝豆は三秋であり、セットで六か月、抜群の組み合わせを楽しむことになる。枝つきのまま茹でるので枝豆という名がついた。十五夜に供えることから月見豆ともいう。

晩夏の季語に「夏豆」というのもあり、「新枝豆」とも詠まれる。これは立秋前に収穫する枝豆で、ハウス栽培のものは五月頃から市場に出る。

枝豆を食べる習慣は日本以外にはほとんどない。中国、台湾、タイから、日本で枝豆が出回る前、三月から五月にかけて台湾から生鮮えだまめが輸入される。冷凍枝豆は大量に輸入され、国内生産量約七万トンに対して約六万トンが輸入されている。

丹波の黒豆の枝豆は、一〇月中旬の二週間しか収穫できないので、幻の黒豆枝豆と言われる。多くの農家が二年間隔で黒豆を植えるが、四年間隔を守って無農薬という農家もある。

ただちや豆は、枝豆用として栽培される大豆で、山形県庄内地方の特産品である。越後から庄内に伝わった品種を選抜育成したものとされる。

『氷室』2018年11月号掲載用

季語つれづれ 番外（四二） 初冬

尾池和夫

【蓮根掘る】 蓮根（はすね）掘 蓮根（れんこん）掘る

蓮根は正月に需要が多く一二月が収穫の最盛期で、蓮田で行う重労働である。

名の由来は、花托が蜂巢と言われたことからで、穴は通気組織で、葉茎花に貫通しており、地下茎である蓮根に連結する。節の若芽が枝別れして子蓮根が伸びる。収穫するのは親蓮根で、新芽の向きを見て判断するという。

蓮根の主成分は糖質である。また、ビタミンCが豊富で、加熱しても多く残る特長がある。不溶性の食物繊維、タンニンが含まれており、カリウム、鉄、銅、亜鉛を多く含む。

霞ヶ浦流域が蓮根の主産地である。茨城県の霞ヶ浦湖畔では昔からの蓮根栽培が続けられている。農園の水田は、長い年月をかけてできた天然腐葉土を含む土壌と霞ヶ浦の豊富な水に支えられている。茨城産は、作付面積、出荷量ともに全国一で、全国の出荷量の約五三パーセントを占めている。東京市場の九〇パーセントが霞ヶ浦周辺で生産されたものである。霞ヶ浦沿岸は低湿地帯が多く、蘆などの野草が堆積して土壌が肥えた泥炭性埴土となっている。さらに降雪の少ない温暖な気候が蓮根の栽培に適合している。

蓮根を食用とするのは日本、中国など少数の国である。日本では穴が、先を見通す縁起の良い食品とされ、慶事に欠かせない食材である。

『氷室』2018年11月号掲載用

季語つれづれ 番外（四三） 三冬

尾池和夫

【牡蠣】 真牡蠣 酢牡蠣 牡蠣飯

天然の牡蠣は海岸の岩礁に付着しており「牡蠣打」は手鉤で取る。牡蠣船、牡蠣剥く、牡蠣鍋の関連季語が多い。

牡蠣の名は、岩から「掻き落とす」というのが由来であろう。世界の各地で食用とし、薬品、化粧品、建材などにも利用する。殻は、炭酸塩鉱物の方解石を主成分し、岩や他の貝殻など硬質の基盤に着生する。船底の大敵でもある。筋肉が退化し内臓が多くを占める構造となった。

牡蠣は、約二億九九〇〇万年前からのペルム紀に出現し、極地を除いて分布する。オイスターという英語は、さらに広義で岩に着生する牡蠣に似た貝のことを指す。

美味しい牡蠣が養殖で生産される。日本では筏方式が多く、牡蠣の幼生が浮遊し始める夏の初め、帆立の貝殻を筏で海に吊るす。それに幼生が付着し、豊かな海に放置しておくで育つ。畠山重篤「森は海の恋人」（文春文庫）は、豊かな汽水域の恵みは森があつてこそという信念から、山に木を植え始めた一九八〇年代からの記録である。

気仙沼の唐桑半島は山々に囲まれ、いい漁場である。半島の西側の内海に穏やかな海面一帯には牡蠣や帆立貝の養殖筏が広がっている。牡蠣養殖筏の見学の後に、牡

蠣小屋では鉄板で豪快に焼き、大粒の牡蠣で海の味を楽しむ企画もある。

『氷室』2018年12月号掲載用

季語つれづれ 番外（四四） 仲冬

尾池和夫

【甘蔗刈】 甘蔗刈（きびかり）

甘蔗は砂糖黍のことで、沖縄や鹿児島など、暖かい土地で栽培されている。沖縄では一二月から三月に収穫する。

砂糖には、上白糖、グラニュー糖、白双糖、三温糖、中双糖、角砂糖、氷砂糖、液糖、和三盆、黒砂糖などがある。

上白糖が白砂糖、グラニュー糖は大きな結晶、白双糖は結晶がグラニュー糖より大きく無色透明、三温糖は黄褐色で特有の風味、中双糖は表面にカラメルをかけて黄褐色、角砂糖はグラニュー糖を四角に固めたもの、氷砂糖は大きな結晶、液糖はガムシロップに使う。

和三盆は伝統的製法で非常に小さい結晶で珍重され、徳島県や香川県で作られる。徳島は、砂糖黍の北限で花が咲かないので糖度が高くなる。黒糖あるいは黒砂糖は、砂糖黍の搾り汁をそのまま煮詰めたもので、濃厚な甘さと強い風味があり、沖縄や鹿児島、南西諸島で作られる。瀬底月城著『沖縄・奄美南島俳句歳時記』によると、沖縄の季語には「甘蔗の穂」「甘蔗の花」「花甘蔗」などがある。

砂糖の発明は二五〇〇年前のインドで、イスラム圏、ヨーロッパへと伝わった。日本には奈良時代に鑑真によって伝えられ、貴重で医薬品として扱われた。室町時代には砂糖羊羹、砂糖饅頭など、砂糖の名が付く菓子が見られるようになった。貴重な様子は狂言『附子』の中で描かれている。

『氷室』2018年12月号掲載用

季語つれづれ 番外(四五) 仲冬 尾池和夫

【藪巻】 菰巻

菰巻は、江戸時代から大名家の庭園で行われてきた害虫駆除法である。松毛虫を除去する方法の一つで、松枯葉の中齢の幼虫が、冬になると地上に降りて、枯葉の中などで越冬する習性を持っている。このために、一二月頃、松やヒマラヤ杉の幹の地上二メートルほどの高さに、藁の菰を巻きつけ、春先に、この「こも」の中で越冬した松枯葉の幼虫を菰ともども焼却し、松枯葉を駆除する。時期から冬支度の解釈があるが、決して防寒目的ではない。

しかし松枯葉の天敵を燃やしてしまうという指摘もある。兵庫県立大学環境人間学部の新穂千賀子らの姫路城で行った調査では、菰巻に捕まった松枯葉が少しいたのに対してその天敵が大多数を占めており、害虫駆除の効果はほとんどなくて逆効果であることが判明した。

皇居外苑や京都御苑ではすでに以前から菰巻が行われていない。浜松市や姫路城でも逆効果であるという理由で中止している。

蘇鉄など、熱帯や亜熱帯植物の菰巻は、松の場合とまったく違い、雪や霜から葉を守る防寒対策として実施され、全体を覆うように菰を巻く。また、低木や竹などの菰巻は雪折れを防ぐために行っている。京都の植物園では一二月初めに蘇鉄の菰巻が見られる。

『氷室』2019年1月号掲載用

季語つれづれ 番外（四六） 晩冬 尾池和夫

【氷柱】 垂氷（たるひ）、立氷、氷筍、氷筋

さまざまな呼び方がある。しずくが凍って軒先や枝、崖などから垂れ下がる。寒さの厳しい地域では軒先から地面にまで達することもあるが、寒さの厳しさを忘れさせる景色をなす。氷柱が名物になる土地もあり、秩父路三大氷柱と呼ばれているのは、三十槌（みそつち）の氷柱、尾ノ内溪谷の氷柱、あしがくぼの氷柱がある。

氷柱と似ているが「氷筍」は、歳時記には載っていない。摂氏マイナス三度程度で、洞窟の中で発生する現象で、滴り落ちた雫が瞬時に床の上に凍りついたものである。筍のような形でこの名で呼ばれる。数千本単位で発生することがあり、

鍾乳洞の石筍と似ている。氷筍は少しずつ滴り落ちた水が凍るので、ほぼ完全な単結晶となっている。滑りがよく、スケートリンクに、輪切りにした氷筍を敷き詰めて使う。長野五輪スピードスケートでも使われた。水と同じく透明で美しい単結晶ができる。水分子が六角形の網目をつくって整然と並んでいる。

長岡技術科学大学雪氷工学教授の上村靖司さんは、零度より高い環境で氷の単結晶を作る方法の特許を得ている。

氷はさまざまな表情を見せてくれる。氷の結晶は氷晶というが、大気中で氷晶が成長して、霰や雹など、さまざまな季語となっている。

『氷室』2019年1月号掲載用

季語つれづれ 番外（四七）冬

尾池和夫

【気嵐（けあらし）】

海、河川、湖などの水面から霧が立ち昇る現象で、気象用語では「蒸気霧」と呼ぶ。気嵐の語源は北海道の留萌地方の方言で、俳句では冬の季語である。

夜間に放射冷却によって冷やされた陸上の空気が、暖かい水面に流れ出したとき、水面の水蒸気を冷やすことによって発生する。気温が最低になる早朝に発生し、昼前には消散する。冬の北日本で発生するが、厳冬期には西日本で見られる。

留萌市の黄金岬海浜公園をはじめ、留萌管内沿岸全域で見ることが出来る。快晴で、気温がマイナス一五度前後、海水温と気温の温度差が一五度以上あること、風速が毎秒三・五メートルの緩やかな風の時の早朝五時頃という条件がある。

留萌の他にも、富山県氷見で今季一番という冷え込みの時に現れてニュースになった。京都でも広沢池に現れたことがある。

舞鶴湾では、由良川河口の蒸気霧と海上に流れ出が気嵐が発生したという報告がある。愛媛県大洲市の長浜大橋を覆った「肱川あらし」が紹介されている。

宮坂静生著『季語の誕生』（岩波新書）では、ことばに土地の貌が映し出されており、季節と共にことばが立ち上がるとして、「地貌季語」への期待と展開を論じた。彼は長野の出身であり、地貌季語の中に気嵐を載せている。

『氷室』2019年2月号掲載用

季語つれづれ 番外（四八） 晩冬

尾池和夫

【年内立春】

立春は二十四節気の第一で正月節（旧暦一二月後半から一月前半）である。定気法では太陽黄経が三二五度のときで、太陽暦の二月四日ごろになる。暦ではそれが起こる日を指し、天文学ではその瞬間、恒気法では冬至から八分の一年（約四

五・六六日) 後で二月五日ごろとなる。期間としての意味もあり、この日から次の節気の「雨水」前日までを指す。

旧暦の元日は大雑把にいうと雨水を含む月を正月として決めるから、立春より前になったり後になったりする。後者の場合を年内立春という。立春の日の旧暦を見ると、二〇一八年は一月一九日、二〇一九年は二月三〇日で、ともに年内立春、二〇二〇年は一月一日だから、こちらは「新年立春」という。

年内立春は珍しいことではなくほぼ半分は該当する。にもかかわらず珍しい現象のように誤解されているのは、蕪村の句に「年の内の春ゆゆしきよ古暦」があつたり、芭蕉も一茶も詠んでいたりするためであろうか。

『古今集』巻頭、在原元方の「年の内に春は来にけりひととせを去年とやいはん今年とやいはん」も知られている。子規は、『歌よみに与ふる書』で、「先づ『古今集』といふ書を取りて第一枚を開くと直ちに「去年こそとやいはん今年とやいはん」といふ歌が出て来る、実に呆あきれ返つた無趣味の歌に有之候。日本人と外国人との合あいの子こを日本人とや申さん外国人とや申さんとしやれたると同じ事にて、しやれにもならぬつまらぬ歌に候。この外の歌とても大同小異にて駄洒落だじやれか理窟ツぽい者のみに有之候。」と述べたことでも知られる。

旧暦の元旦が立春に重なると「朔旦立春」と呼ばれ、縁起がいいとされている。前回は一九九二年だった。朔旦立春は約三〇年に一度くらいだからであろうか、季語にはなってい

ない。次の機会は、南海トラフの巨大地震の発生するだろうと言われている二〇三八年である。

歳時記の季節感は太陽暦によく合っている。季語の春は立春から始まる期間とされており、年内立春も間違いなく「立春」である。しかし、歳時記では冬の季語に組み込まれており、これは以前から私にとっては大きな疑問の一つであるが、まだ納得できる説明はない。